



きょうはなにいろ?
けるくるーる

第9号



発行:こぎん刺し 絵糸

2015/3/15

<http://kogin-eito.com/>

季節のぜいたく

⑧ ふきのとう

重なる葉はしっとり、やさしく摘んで。花が咲かないうちが美味しいですよ。

厳しい寒さが緩んで雪解けの頃、土からチラリの顔をのぞかせるもの。フキノトウです。

春先に、庭仕事をしていて偶然見つけるとなんだか嬉しい。もう出てくかな、なんていそいそと探しに行くのも楽しみ。ふわっとやわらかい薄緑色は、まさに春の便りです。

小ぶりでちょうど良い形のものを見つけたら、枯葉と湿った土の中から丁寧に手で掘り出して、台所でキレイにしましょう。柔らかいしわのある葉をそっと撫でて洗います。透けるように薄い葉と、一株の頼りなげな軽さ。さっきまでついていた土の香りも鼻

のあたりに漂ってきます。

水に浮かべて灰汁を抜きながら何にしようか悩むのが、またオツ。短い旬を楽しむには……。刻んでほろ苦さを味わうか。灰汁が強いので献立によっては手間暇が必要でもありますが、食卓を囲む家族で味の感想を言い合いながら季節を感じるのには、なにより贅沢と言えるかもしれませんね。それから暫くたてば、長ーく育ったふきもお店で見かけるようになりまます。塩で灰汁抜きし、筋や皮を取り除いたあと、しらすと一緒にオリーブ油で炒めて、好みの味付けをすると、和洋どちらの食卓にもオススメです。



三月の一句

幾たびも鶯の声きたえたり

(渚)

家族が留守の午前中。ひとり静かなお茶の時間に窓の外から今年も聞こえた、鶯の声。まだあまり上手な鳴き方ではない。けれど、聞いていればなんとも一生懸命に同じフレーズを繰り返すものだ。春が来たのがそんなにうれしか、それとも歌声の練習か。次第に艶を増す春の音を聞くうちに胸打たれて、その愛らしさを誰かに教えたくなくなってしまふのだ。



モドコ・アレコレ
⑨ ベコの足

歩みは遅いが頼もしい。

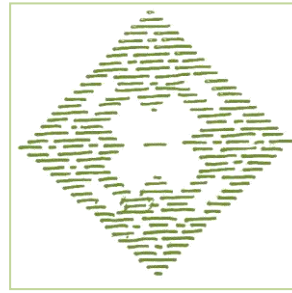
今回ご紹介するのはベコの足。ベコ刺ともいいます。ベコとは東北弁で牛のこと。「べー」という鳴き声に東北弁のコをつけてそう呼ばれます。わんこ、とかにゃんこ、とかと同じノリですね。コがつく名詞は、親しみのあるものやかわいらしいものが多いようです。ですから、ベコと呼んだ昔の人々か、いかに牛と深く関わってきたかも感じられます。

古来日本では、牛は農耕のための貴重な労働力でした。一説によれば古墳時代のハニワにさえ牛の形があるといえますから、その歴史は長い。田畑を耕す人にとって、丈夫で力持ちの大切な相棒だったのです。加えてあの黒々とした大きな瞳と、おしゃべりな餌を食むゆったりした口の動き。つい、お前美味しいか、と声をかけたくなるような愛敬があります。昔の



人がモドコにしたのも頷けますね。

さてモドコの形に戻ってどこが牛なのかと考えてみますと、その中心には白く抜けたバツテンじるし。



ベコの足

実際の牛の蹄はチョコキの形ですから、上下対称に二つの蹄を配置して真ん中で連結した形のデフォルメなのでしょう。由来は不詳ですがベコ刺しと呼ぶこともあるので、ツノや頭の形を想像する人もいたのかもしれない。モドコの四隅を四ツ花ツコが

モドコを組み合わせる時は、中心の白抜き部分の配置を意識し

てみましょう。また、四ツ花ツコからの、二本のラインの伸び方を覚えると、こぎん刺しの図案づくりのヒントにもなります。大ぶりのモドコなので、見た目に華やかな雰囲気を出すことができますね。

余談ですが、牛の蹄ってひと月に5ミリほど伸びるそうです。ゆっくりペースのそんなところもなんだかちょっとかわいい。ベコの足のモドコ、ぜひ使ってみてください。



天神さまの梅まつり



二月の東京、蔵前橋通り。亀戸駅からほど近くの亀戸天神では、梅まつりが始まっています。

天神さまと言えば、言わずと知れた菅原道真。彼は梅を好んだことでも知られ、家紋も梅を模したものでした。境内にも『美しや紅

の色なる梅の花 あこが顔にもつけたくぞある』という歌碑が建てられています。博学で有名だった道真ですが、とても素直な人間らしい目線で梅を愛でていたことが想像できて、親近感が湧きます。



よく晴れた空の下、小さな屋台がささやかに賑わす中を、樂しげにそぞろ歩く人々。敷地をぐるりと囲む参道に並んだ梅の木は、まだ冷たい空気の中、ちゃんと紅白黄の花を咲かせていました。あの枝は「く」の字を描いて力強く、またあるものは丸い花の玉を下げて枝垂れと、姿も色もとりどりで。なにより漂う花の香りの甘さは素晴らしいもので、五感で春の訪れを味わいながらお参りすることがができます。

梅の名所と言われるだけに、平日というのに結構な人出です。家族づれや年配のお友達同士が、気に入った樹の前で足を止め、カメラを向けたり、気の向くままにゆくり眺めたり。日向ぼっこするおじいさんが多いのは、設置されたベンチのおかげなのでしょう。

おみくじを引いたら撫牛で厄払いして、亀戸天神の由来・池の亀の日向ぼっこを横目に、梅を眺めながらもう半周。そのころにはちよっとした梅博士になっていたりして。

帰りには、文人たちが愛した船橋屋で、濃厚な黒蜜とともにくず餅やあんみつを食べるのもまたよし。近くには江戸切子の工房や、少し足を伸ばせば隅田川やスカイツリーと、春のお散歩にはびつたりの亀戸界限なのです。



今月の
ホットペッパー
おちてまーし
箱の残り香
なお愛し。

No.002 江戸から続く桜もち。

《編集後記》

春は感覚が冴える季節。花粉症に負わずに、散歩も楽しみたいものです。気をつけて観察してみると、一番早く春を見つけてるのは、きっと鳥類じゃないかしら。◎